

平成29年度あきた型学校評価

(1)豊かな教育のある学校の実現

評価領域	豊かな教育
------	-------

重点目標	「キャリア教育全体計画」に基づいた、児童生徒が経験から考え、行動する力を高める授業を目指した授業改善	P		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 「キャリア教育全体計画」を作成し、小中高を貫く教育課程を編成した。 「キャリア教育全体計画」に基づいて、指導の形態毎に年間指導計画を見直している。 授業のねらいと評価の妥当性をより高める必要がある。 各教科等を合わせた指導について、各教科の目標や内容との関連を明確にする必要がある。 			
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> 「キャリア教育全体計画」に基づいた年間指導計画を作成する。 「キャリア教育全体計画」に基づいて授業のねらいと内容を見直し、授業改善する。 総合教育センターと連携した授業研究会を計画的に実施し、教員一人一人の授業力を向上させる。 			
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> 教員全員が提示授業にかかわる授業研究会を計画的、継続的に行う。 総合教育センターの指導主事から継続的に情報提供や助言を受けて、授業改善する。 			
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 小学部は日常生活の指導、中学部は生活単元学習、高等部は職業科を取り上げた。「キャリア教育全体計画」をベースとして長期的な目標設定、スモールステップの課題設定をした。授業の構想段階から話し合いを重ねた（ベースミーティング）。学部授業研究会、全校授業研究会を15回行い、センター指導主事から指導助言を受けた。公開研究会では提示授業の他に国語・数学の授業も公開した。 	D		
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> 学部毎にテーマを設け、授業改善を図ったことで、児童生徒の自己選択、自己決定ができる場面が増えたり、友達と関わりながら活動に向かう姿が見られるようになったりするなど、児童生徒の主体性が高まった。 			
自己評価	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center; width: 10%;">B</td> <td> 学部毎の成果は今後の授業づくりに生かしていくことができるものであった。教育センター指導主事の助言を受けて研究を進めることができたが、計画的に行っていくことができなかった。 小中高のつながりについて全校研究会等で視点を明確にした協議をしていく必要がある。 </td> </tr> </table>	B	学部毎の成果は今後の授業づくりに生かしていくことができるものであった。教育センター指導主事の助言を受けて研究を進めることができたが、計画的に行っていくことができなかった。 小中高のつながりについて全校研究会等で視点を明確にした協議をしていく必要がある。	C
B	学部毎の成果は今後の授業づくりに生かしていくことができるものであった。教育センター指導主事の助言を受けて研究を進めることができたが、計画的に行っていくことができなかった。 小中高のつながりについて全校研究会等で視点を明確にした協議をしていく必要がある。			
↑ 評価基準 ↓ A：具体的な活動がなされ目標を達成できた B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない				
学校関係者評価と意見	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center; width: 10%;">A</td> <td> 今後「深い学び」をどう捉え、どのような授業をしていくのかが問われる。力が身に付くこと、身に付いた力を自ら活用していくためには深い理解が必要である。評価の仕方を工夫していく。 理解を確実にするためには「練習」が必要である。繰り返しによって自信が付く。授業公開を積極的に行うことで授業力の向上を図ってほしい。 </td> </tr> </table>	A	今後「深い学び」をどう捉え、どのような授業をしていくのかが問われる。力が身に付くこと、身に付いた力を自ら活用していくためには深い理解が必要である。評価の仕方を工夫していく。 理解を確実にするためには「練習」が必要である。繰り返しによって自信が付く。授業公開を積極的に行うことで授業力の向上を図ってほしい。	C
A	今後「深い学び」をどう捉え、どのような授業をしていくのかが問われる。力が身に付くこと、身に付いた力を自ら活用していくためには深い理解が必要である。評価の仕方を工夫していく。 理解を確実にするためには「練習」が必要である。繰り返しによって自信が付く。授業公開を積極的に行うことで授業力の向上を図ってほしい。			
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	キャリア教育全体計画に基づいた授業づくりを進める。「深い学び」を追究し、児童生徒が身に付いた力を生かしていくことができるようにする。そのために評価の観点を明確にするなど検討していく。 公開授業研究会をはじめとして授業参観の機会を積極的に設けて様々な視点から指導助言を受け、授業改善する。 センター指導主事等から指導助言を受けながら各教科の指導力を高めていく。	A		

(2)豊かな地域生活への支援

評価領域	地域支援・地域交流
------	-----------

重点目標	交流及び共同学習や地域との交流活動の計画的、組織的、継続的な実践		P
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高全ての学部で交流及び共同学習が継続的に実施されている。 ・居住地校交流は継続的に実施されており、希望する保護者が増えている。 ・毎年、みどりっこ夏まつりを開催しており、地域住民の参加が増えている。 		
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> ・交流及び共同学習、居住地校交流の成果を評価し発信する。 ・第10回みどりっこ夏まつりを開催することにより、地域との連携を深める。 ・ホームページや学校便り等を通して地域の方々や保護者等に交流の意義が伝わる発信をする。 		
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> ・交流及び共同学習、居住地校交流について達成状況を把握するための評価のあり方を見直す。 ・夏まつりが児童生徒、保護者、関係機関や地域の方々のアイデアが生かされるよう意見を聞く機会を設けるとともに、参画の様子を発信する。 ・ホームページを迅速に情報更新したり、学校便り等の発行時期や内容を工夫したりする。 		
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・学校間交流24回、地域交流69回、居住地校交流42回実施し、その都度ホームページや通信等で発信した。 ・夏まつりの開催に当たっては、地域の方々、出店団体との連絡会や反省会を行った。 ・ホームページの迅速な更新や各種の通信による発信の他、報道機関への情報提供を積極的に行った。 		D
達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流を実施している小学部児童は70%近くになり、一人の児童が複数回実施することから双方が楽しみにする学習となった。 ・必然性をもった地域交流ができる学習内容に取り組むことで、生徒が主体的に活動できるようになってきている。 		
自己評価	A	小学部は希望する児童全員が居住地校交流を行うことができた。継続して行うことで小学校の理解もすすんでいる。交流活動の継続により関係が深まってきている。ホームページや通信等の発信を継続的に行った。	C
	↑ 評価基準 ↓	<p>A：具体的な活動がなされ目標を達成できた</p> <p>B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない</p> <p>C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p>	
学校関係者評価と意見	A	地域に出ることで多くの人と関わり、学びがあるので今後も継続してもらいたい。就労先には国語や数学等の力を伝える必要がある。新聞掲載などを児童生徒にも伝え自己有能感、自己有用感を高めてほしい。	C
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<p>中学部の学校間交流、居住地校交流に取り組む。夏まつりを継続的に開催すると共に地域の行事等への参加を促進する</p> <p>多くの方々から「認められる」「褒められる」経験ができるように教育活動の発信を促進する。</p>		A